氷釈の章　　尾池和夫選　　2024 年 12 月号

霞袂集

秋は夕暮いましばらくの窓明り　　尾池葉子
寄れば止み離るればまた虫の声　　大島幸男
新町の名妓にありし露の墓　　長野眞久
日の匂ひ四方に散らして稲雀　　三和幸一
みづうみの五つを跨ぎ鳥渡る　　原　　稔
長き夜の夢や奪衣婆からこうて　　伊藤武敏

氷凌集

かまつかをひと叢残し転居せり　　鴻坂佳子
流水を弾き飛ばして林檎の香　　大口彰子
一羽来て一羽飛び去る一位の実　　羽鳥正子
豊の秋薬飲むため飯を食ひ　　重富國宏
女郎花さがして出あふ男郎花　　西村みゑ子
迷ひ子のごとどんぐりのころがりぬ　　森すゞ子

氷釈の章　　尾池和夫選　　2024 年 11 月号

霞袂集

朝凪の瀬戸おほかたは漁の船　　尾池葉子
ゆふべよりけふ月まろき歩道橋　　大島幸男
新涼や背びれ尾びれの化粧塩　　原　　稔
夕暮や小舟追ひ抜く飛魚の影　　余米重則
涼風至る銀閣寺なり花頭窓　　伊藤武敏
新涼の水一滴の硯かな　　古川邑秋

氷凌集

帰り路を影踏み合うて秋夕焼　　大口彰子
連山を一刀のごと稲光　　渋谷啓子
一望の河岸段丘鬼やんま　　佐藤美智子
残暑なほ斜陽を浴びし普賢岳　　重富國宏
安曇野の水音絶えず合歓の花　　鴻坂佳子
秋めくや手に遊ばせて砂時計　　羽鳥正子

氷釈の章　　尾池和夫選　　2024 年 10 月号

霞袂集

青邨宅台所脇蠅叩　　尾池葉子
水盤に陶なる蟹を放ちけり　　大島幸男

わが余生日済に似たり枇杷熟るる　長野眞久
落人の棲みし谷とや独活の花　原　稔
だぼ沙魚の上目づかひに潜みをり　岡橋啓二
夕端居太陽風の今届く　余米重則

氷凌集

向日葵の畑へ着陸便の風　鴻坂佳子
言葉よりことばこぼるる心太　大口彰子
我が避暑は循環バスと文庫本　重富國宏
身長を上書したり素足の児　益子桂子
養蚕の名残り桑の実つややかに　佐藤美智子
青しぐれ御土居の跡の行き止り　城島千鶴

氷釈の章　尾池和夫選　2024 年 9 月号

霞袂集

埃すら涼しきさまの布袋尊　尾池葉子
笹舟の向きを変へたる花藻かな　大島幸男
五月川蘇我氏治めし地を奔り　長野眞久
父の逝きし京終の地や星涼し　岡橋啓二
蛸の潜む素焼の壺の揚げられて　余米重則
顔つきのどこか優しき袋角　古川邑秋

氷凌集

山鳩の頻りに鳴くも鑑真忌　羽鳥正子
仏足石に鎮座ましますヽ蟾蜍　重富國宏
一足す一の答はいくつさくらんぼ　大口彰子
蓼科の樹林をこぼれ夏灯　鴻坂佳子
波くぐる川鵜や宇治の闇深し　竹中教子
車椅子押して押されて夏帽子　木村静子

氷釈の章　尾池和夫選　2024 年 8 月号

霞袂集

新緑に深海めくよ吉田寮　尾池葉子
薫風や自治とはごみの溜るもの　大島幸男
月面に窪み地表に麦の秋　長野眞久
麦秋や地平ちかくにある冥さ　三和幸一
農を継ぎ村を継ぎきて麦の秋　原　稔
浪寄する能登の絶壁大海月　岡橋啓二

氷凌集

汗ばむや緑青の吹く地獄門　四宮陽一
空つかむやうに体操薄暑光　大口彰子
花樗奥まるところ吉田寮　城島千鶴
接待の麦湯千本えんま堂　重富國宏
老鶯や半分となる竹林　南田美惠子
かりゆし着五月の空になじみたり　屋嘉比順子

氷釈の章　尾池和夫選　2024 年 7 月号

霞袂集

茶の畦の曲がるあたりよ蕨生ふ　尾池葉子
菓子の神料理の神や洛は春　大島幸男
菜の花の蝶に化す日の地震ひとつ　長野眞久
石垣の温みに添うて初蝶来　三和幸一
山桜山より遅れ昏れにけり　原　稔
山里を明るうしたる初音かな　岡橋啓二

氷凌集

夕風に揺れゐるうちに夜桜ぞ　服部喜美子
赤旗の合図を送り若布舟　川上和昭
ただいまと靴音かろき春夕焼　大口彰子
利根川のあをき川面や鯉幟　羽鳥正子
四拍子つらぬくドラム夏近し　四宮陽一
父の書の繕ひ跡や啄木忌　渋谷啓子

氷釈の章　尾池和夫選　2024 年 6 月号

霞袂集

白魚のやや小さしと卵とぢ　尾池葉子
吾が影の背筋伸ばしぬ春の風　大島幸男
二月堂に残る火の香や奈良に春　長野眞久
せせらぎを少し濁して芹を摘む　原　稔
軒ごとの風と遊べる吊雛　岡橋啓二
仔だぬきの顔出しさうな木の芽時　余米重則

氷凌集

床下に甕の息づく春の闇　四宮陽一
くるくるとパスタからめて春の色　大口彰子

篝火の火の粉条成す送水会　吉田多々詩
蛇紋岩踏むたび近き山桜　竹中教子
足跡を波が消しゆく春愁ひ　山中ひでの
ひととせは長く短く雛納　佐藤美智子

氷釈の章　尾池和夫選　2024 年 5 月号

霞袂集

豆や鰯や追儺とて患者食　尾池葉子
漉き込みし葉の鴇色や春日差　大島幸男
年内立春生みたての卵手に　長野眞久
こころなしか空気の軽き寒の明　原　稔
鉛筆の転がる先の春障子　余米重則
白鳥のごとき氷柱へ雨無情　伊藤武敏

氷凌集

春愁の朱書きの多き譜面かな　大口彰子
渡し場の跡形もなし草青む　真下章子
春疾風比叡に向かふ竜の雲　四宮陽一
鯉のひく藁屑にあり薄氷　鴻坂佳子
春立つや双岡に三の岡　重富國宏
待ちきれず子鬼飛び出す鬼やらひ　吉田恭子

氷釈の章　尾池和夫選　2024 年 4 月号

霞袂集

節分の豆や鰯や患者食　尾池葉子
四日はや社の庭の火焚跡　大島幸男
冬深し研生むほど声出でず　長野眞久
その先に日本海溝初日の出　余米重則
元日の地震よ嬰の盾となり　中嶋文子
冬ぬくし松の間に間に比叡山　古川邑秋

氷凌集

大霜や砂金を撒きしごとき屋根　羽鳥正子
幼子の両手づかひのかるたかな　大口彰子
火の国のカルデラ照らす冬の雷　四宮陽一
くきくきと霜の畝ゆく番鳩　鴻坂佳子
喪の家も僧のおとなふ御年頭　酒井富子
雨の日の軒端にこぼれ竜の玉　城島千鶴

氷釈の章　　尾池和夫選　　2024 年 3 月号

霞袂集

叡山を鬼門に霽れて師走かな　　尾池葉子
枯禾の背よりも高き川の径　　大島幸男
あれやこれ柚子湯の柚子の悪しき相　　長野眞久
北陸の空の重さよ冬至梅　　原　　稔
鳴く声の風にちぎるる夕千鳥　　岡橋啓二
冬帽に肩車され冬帽子　　余米重則

氷凌集

極月や下手な強がり誰に似し　　大口彰子
ビロードの箱より銀器クリスマス　　鴻坂佳子
歳晩やかたむけ洗ふ瓶の底　　羽鳥正子
どの馬も同じはう向く寒さかな　　南田美惠子
荒行の九字切る声や冬の滝　　竹中教子
ヒチコック想ひ出したる寒鴉　　川上和昭

氷釈の章　　尾池和夫選　　2024 年 2 月号

霞袂集

足音へ鰡飛ぶ闇に汐の香も　　尾池葉子
かしはでの今朝よくひびく神の留守　　大島幸男
吹き溜る木の葉はすでに夜の色に　　長野眞久
狐火や村史に残る寺の跡　　原　　稔
手術着の廊下を走る寒夜かな　　余米重則
菊月やターフに尖る馬の影　　伊藤武敏

氷凌集

幼名の墓にたんぽぽ返り花　　鴻坂佳子
はちみつの喉越すまでを冬めきぬ　　大口彰子
流れゆく落葉いづくへ水路閣　　四宮陽一
寄付募る博物館や文化の日　　重富國宏
地鳴りかと坐り直しぬ秋の雷　　城島千鶴
お火焚や井桁の中に火が奔り　　吉田恭子

氷釈の章　　尾池和夫選　　2024 年 1 月号

霞袂集

一献を献げ二夕夜の月とせむ　尾池葉子
秋さびし刺蛾の殻を吹けばなほ　大島幸男
坩堝炉の硝子のごとき熟柿かな　三和幸一
温め酒つつくは兜煮の目玉　原　稔
晩秋の野は茫々と鳶の笛　岡橋啓二
鰯雲とび職ひよいと棟跨ぎ　余米重則

氷凌集

秋麗や駆け上がりきる石の階　大口彰子
改築の仕事最後の障子貼る　川上和昭
禊川の流れそのまま川床仕舞　四宮陽一
いたつきの肩を庇うて柿を捥ぐ　吉田多々詩
見るとなく手相見てゐる夜長かな　渋谷啓子
上げ潮の川面ゆらめく夜業の灯　鴻坂佳子